特集

盛岡の冬を楽しむ「雪あかり」

ちいさな灯りが結ぶ 心の輪

開催当初からメイン会場には、宮澤賢治の童話にまつわるテーマを設定。今年のテーマは「もりおかの音色」。雪像は「セロ弾きのゴーシュ」を題材につくります。

四季折々、いろいろな景色を楽しませてくれる盛岡の街。「チャグチャグ馬コ」などの伝統行事や「盛岡さんさ踊り」など、観光イベントの多くは春から秋にかけて開催されます。寒さが厳しい盛岡の冬季の観光イベントは小岩井雪まつりくらい。観光客が落ち込むのは、いたしかたないとあきらめてはいませんか。当所が盛岡の冬季観光対策として、盛岡城跡石垣のライトアップ事業を始めたのは20年前。今その場所を中心に寒さを逆手にとって楽しみ、観光資源に変えようとする取り組みが進んでいます。それは、5年前に始まった『もりおか雪あかり』。気軽に誰もが参加できる冬のイベントとして、市民に少しずつ浸透、定着化しつつあります。

市民参加型のイベント

県庁所在地としては、本州一の寒さで知られる盛岡の冬。毎年2月初旬、キリリと冷え込む夕暮れ時に、盛岡城跡公園周辺で、手づくりの雪あかりキャンドルが灯されます。

『もりおか雪あかり』は、市や観光関係機関、民間のNPOが中心となって構成する盛岡市観光推進委員会の活動の一環としてスタートしました。実行委員会を立ち上げ、第1回目を開催したのが、2005年2月のことです。

「雪あかり」とは、雪でつくったバケツ程度の大きさのかまくらにキャンドルを灯して広い敷地や道端などに並べ、冬の街に温かみ溢れる幻想的な世界を創りあげるもの。

「街中の皆が、楽しみながら参加できる」。雪あかりの魅力についてこう話すのは、雪あかり実行委員会の幹事長を務める高橋理(おさむ)さんです。ホテルメトロポリタン盛岡・営業総括支配人として、観光客を受け入れる立場にある高橋さんは、盛岡の観光資源をPRするさまざまな誘客活動に携わっており、立ち上げ当初から『もりおか雪あかり』の運営にも関わってきました。

紫波町出身の高橋さんにとって、雪は幼い頃から身近に日常的にあったもの。「盛岡は冬の寒さが厳しく、雪が降れば文句を言うけど、降らないと寂しい。せっかくだから雪のある冬を存分に楽しみたい」と話します。

継続のパワーは市民ボランティアの力

手探りのスタートを切った翌年、高橋さんは運営スタッフと共に、雪あかりの先駆的存在である北海道小樽市へ視察に行きました。今年11回目を迎える『小樽雪あかりの路』は当時から注目されており、現在では台湾・韓国など海外も含め、約1,800人ものボランティアがスタッフとして参加。2月の期間中10日間で約60万人の誘客力を持つ冬の観光イベントに成長しています。運河沿いを中心に街全体に広がる雪あかりの幻想的な美しさに感動したという高橋さん。その一方で、盛岡とは比べ物にならないスケールの違いにショックを感じたのも事実でした。その後、小樽から雪あかりを立ち上げた責任者を招いて勉強会を開催。「見せるだけでは飽きられる。市民が参加することがイベントを継続する大きなエネルギーになる」という言葉に、高橋さんは「目指すところは同じ」、そう感じたのだとか。

「今年からは、県外客に対して早い時期からPRしていきたい」と高橋さん。

右／「1学年全員で参加する雪あかりの体験は、2年生になって多くの人と接したいという思いにつながっていくはず」と角津田さん。
上／盛岡カレッジオブビジネスの学生たちと。

実施にあたっては様々な問題もありました。一昨年は雪不足に悩み、市街地に近い盛岡競馬場から大型トラックで20往復して雪を運搬。なんとかメイン会場分の雪を確保しました。継続こそ力、一歩ずつ課題を解決しながら進んできた『もりおか雪あかり』。少ない予算の中、開催当初から運営の原動力となっているのが市民ボランティア、昨年は総勢880人のボランティアがイベントを支えました。「彼らがいなくては実現できない。大きな力です」。高橋さんはうれしそうに話します。

参加することで街を盛り上げる喜びを実感

「防寒具とシャベル一つで、気構えなく参加できるのがいい」との声は、盛岡カレッジオブビジネスの修学アドバイザー・角津田寿恵（かくつだとしえ）さん。同校と姉妹校である盛岡情報ビジネス専門学校の1年生100人を率いて、第1回目からボランティアに参加しています。学校も地域を構成する一つと捉え、街全体が学びの場と考える同校では、市内のイベントや祭りに積極的にボランティア参加していますが、冬の屋外で催されるのは、この『もりおか雪あかり』のみ。最初は寒さを嫌がっていても、完成した雪あかりを前にすると大きな達成感を感じる学生が多いのだとか。

「自分たちが雪あかりの制作に関わることで、昨日まで何もなかった場所が素敵な観光スポットに生まれ変わることがすごく嬉しいようです。世代を越えていろんな団体と同じ目的を持った時間を共有できるし、イベントに関わることで街がどう動いているか知ることができる。将来きっと役立つはず」と、角津田さんは学生たちの活動を見守ります。

雪あかりに加わる魅力拡がる輪

『氷の盛岡城』が雪あかりの目玉として登場したのは2006年のこと。盛岡城跡公園開園100年を記念して作成したのがきっかけです。

実行委員会で氷の彫刻の実施を担当した盛岡商工会議所佐藤誠司産業振興グループリーダーは当時を振り返って「お城の形状や設置場所はどうするかといった問題から、120kgもある氷柱を200本も使うために必要な大型トラックやフォークリフトの手配、安全対策など1つの問題が解決しても新たな問題が起きるといった手探り状態で進めるしかなかったことを覚えています。夜中まで及んだ作業で完成した氷の盛岡城を見たときは感激しました」と話してくれました。

以来、市内ホテルのシェフや建設業者にも協力いただき制作するという新たな輪も生まれ、氷の彫刻は雪あかりの目玉として定着。昨年はカナダ・ビクトリア市にあるクレーグダーロック城が再現され、キャンドルライトの灯りとは違った美しさで訪れる人たちの目を楽しませています。

夕暮れが辺りを闇に包むと、柔らかな光が町を彩ります。

■取材協力　ホテルメトロポリタン盛岡：019-629-2601
盛岡カレッジオブビジネス：019-651-5001

小さな灯りを起点に新たな連携をめざして

当初2，500個から始まった雪あかりキャンドルの数は、昨年は延べ25，000個にまで増え、入場者も36，000人を超えました。開催エリアは、盛岡城跡公園をメイン会場に中津川周辺、菜園の川徳前、盛岡駅前まで広がっています。そして昨年は八幡町商店街や上田商店街、青山町内会などが、自発的に雪あかりを灯すようになったのです。

「あちこちで、時期を合わせて雪あかりをしてくれるところが増えてきた。自由にやっていいんです。それこそが『もりおか雪あかり』の目指すことだから」と高橋さん。

イベントに参加することで、街に対する愛着も深まり、訪れる人を迎える意識も育まれることでしょう。『もりおか雪あかり』が、冬の盛岡の観光の象徴、起点となることで、地域や人、イベントなど新しい連携が生まれることも期待されます。こうしたつながりの中、子どもや親子、学校や企業などの団体等、多くの盛岡市民がいろいろな形で携わっていくことで、全国にアピールできる冬の観光資源に育てていきたいものです。

小さな灯りが盛岡の冬を明るく照らしてくれることを願い、今年も当所ではその一翼を担っていきます。

取材／「SANSA」企画編集委員会

■「もりおか雪あかり」開催概要
日　　程／平成21年2月3日㈫～7日㈯　午後5時～8時
開催場所／メイン会場：盛岡城跡公園　サブ会場：中津川河川敷、その他参加共同体の実施場所
問い合わせ／もりおか雪あかり実行委員会（㈶盛岡観光コンベンション協会）019-604-3305

つくってみよう！　雪あかり

バケツ1杯の雪があれば、家庭でも簡単につくることができる雪あかり。庭先や駐車場に寄せてある雪を使って、親子で、あるいは町内会や子ども会で雪あかりをつくってみませんか。雪山に穴を開けて、紙コップを置くだけでもOK。雪に着色したり発想一つで自由自在にできるのが、雪あかりの楽しさです。

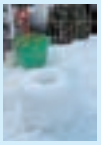
【雪あかりのつくりかた】

❶バケツに雪を入れます。

❷ろうそくを入れる空洞をあけるため、中心部に植木鉢など筒状のものを入れます。

❸固まりやすいように少し水を入れながら、雪をつめます。

❹そのままひっくり返すと、雪あかりスタンドのできあがり。



❺紙コップにロウソクを立て、スタンドの窪みに入れて完成。

盛岡さんさ踊りの30周年を記念し一昨年からライトアップされている開運橋。冬を盛りあげる試みが、地道に広がっています。